

一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機と 継続するための課題

Motives behind General Citizens Participating in a Simulated Patient Volunteer Scheme
& Associated Issues for Consistent Participation

青木 久恵
Hisae Aoki

窪田 恵子
Keiko Kubota

三好 麻紀
Maki Miyoshi

前田 三枝子
Mieko Maeda

町島 希美絵
Kimie Machishima

寒水 章納
Akino Kansui

福岡女学院看護大学紀要

第5号 2014年

一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機と 継続するための課題

Motives behind General Citizens Participating in a Simulated Patient Volunteer Scheme
& Associated Issues for Consistent Participation

青木 久恵 *

Hisae Aoki

窪田 恵子 *

Keiko Kubota

三好 麻紀 *

Maki Miyoshi

前田 三枝子 *

Mieko Maeda

町島 希美絵 **

Kimie Machishima

寒水 章納 **

Akino Kansui

要 旨

本研究の目的は、一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機と継続するための課題を明らかにすることである。研究同意の得られた模擬患者ボランティア6名を対象に、模擬患者ボランティアに参加する動機と継続するための課題について半構成的面接を行った。山浦（2008）による質的統合法（KJ法）に準じてデータ分析を行った結果、一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機は、【社会とつながりたい思い】【自分の経験を活かしたい思い】【患者の立場として看護学生の成長を願う思い】【患者の立場を理解してほしい思い】【新たな知識を獲得したい思い】【自分でもできそうな思い】の6カテゴリーが抽出された。また、模擬患者ボランティアを継続するための課題については、【自分のスケジュールを尊重したい思い】【参加の意思が揺らぐ可能性】の2カテゴリーが抽出された。これらのことから、模擬患者ボランティアに参加する動機には、看護学生の成長を願い、社会の役に立つという利他的な動機だけでなく、自分自身の成長や新たな存在意義、患者の立場を理解してほしいという利己的な動機があることが確認された。また、模擬患者ボランティアを継続するためには、模擬患者ボランティア活動以外の仕事や余暇活動を尊重することや、ボランティア参加の自由意志が尊重される環境づくりが必要であることが示唆された。

キーワード：看護学生、模擬患者、市民ボランティア、参加動機

Abstract

This study aimed to determine the motives behind general citizens participating in a simulated patient volunteer scheme and highlight the issues required for consistent participation. A semi-structured interview was conducted to identify the motives for becoming simulated patient volunteers and the issues raised in sustaining their commitment in six simulated patient volunteers who provided their consent to this study. The data analysis in accordance with the Qualitative Synthesis Method (KJ method) proposed by Yamaura (2008) extracted the following six categories as the motives behind general citizens participating in the simulated patient volunteer scheme: they wished to acquire new knowledge, develop nursing students from the patient's position, gaining understanding of the patient's position, social involvement and making good use of the experience, as well as just because it was something they felt that they could do. Two categories, the respect for self schedules and the possibility of changing the volition of participation, were extracted as the issues raised in sustaining their commitment. The results above confirmed that not only altruistic motives of hoping to develop nursing students and being of use to society, but also selfish motives such as self growth, new meaning of existence and developing understanding of patient positions could drive general citizens to become simulated patient volunteers. It was also suggested that there was a need to value jobs and leisure activities other than simulated patient volunteer activities, and to establish the environment where the free will to become a volunteer was respected in order for simulated patient volunteers to allow consistent participation.

Key Words : Nursing Students, Simulated Patients, Citizen Volunteer, Motive behind Participation

* 福岡女学院看護大学 ** 福岡女学院看護大学 非常勤助員

I. 緒言

近年、看護学生のコミュニケーション能力の不足が指摘されており（厚生労働省医政局看護課, 2007）、看護基礎教育におけるコミュニケーション能力の育成が望まれている（厚生労働省医政局看護課, 2010）。しかし、演習場面の中でコミュニケーション能力を育成しようと試みるが、学生同士では臨場感がなく、価値観も似通っているため、互いに学び合えるような成果はなかなか得られていない。これに対し、看護のリアリティを疑似体験し、その教育効果が報告されているのが模擬患者演習である（大学, 西久保, 土蔵, 2006）。この演習では、模擬という状況ならではの安全性、再現性、反復性を有する学習環境を意図的につくることができると言われている（本田, 上村, 2009）。模擬患者は、Barrows (1968) が医学教育において紹介し、我が国では1970年代、日野原重明氏のライフプランニングセンターでの紹介に始まり、植村(1984)によってSP (simulated patient) として紹介され、医学教育において活用されるようになった。

A看護大学では、これまで看護大学2年次の基礎看護学実習前の演習で、実習指導者による模擬患者参加型演習を導入し、学生が臨床の実情にあった看護技術やコミュニケーション、看護の概念化についての効果を得ている（青木ら, 2011; 三好ら, 2011）。また、本田, 上村 (2009) の報告によると、模擬患者参加型教育においては、学生はリアリティを体験するが故に、適度な緊張感をもって主体的に学習に取り組むなど、学習姿勢に変化がみられるという効果も報告されている。一方で、必ずしも訓練を受けた一般市民が模擬患者を担っている状況ではないため課題も多いことが本田, 上村 (2009) によって指摘されている。模擬患者養成については、看護教育者による模擬患者養成についての研究は少なく、清水 (2007) や黒岩 (2011)、淵本ら (2012) の報告にもあるように、体系的な養成手順や評価がなされていない現状がある。そこで我々は、患者が望む看護職者の育成という観点も踏まえ、一般市民の医療や看護職に対する期待を調査しながら、模擬患者演習の内容や模擬患者養成プログラムについて検討したいと考えた。今年度より市民の協力を

得て、一般市民ボランティアによる模擬患者の養成を試みている。今後、一般市民ボランティアによる模擬患者演習を企画し、初回の臨地実習前に学生が患者との対話場面を疑似体験し、臨地実習に向けての自己の課題を振り返る機会を設定したいと考えている。

このような模擬患者演習を企画するためには、模擬患者の養成が必要であり、同時に演習に見合う人数の確保が必須となる。そのためにボランティア募集をしながら研修会の開催を企画し、模擬患者ボランティアの養成プログラムの運営を検討している。一般的なボランティアにおいては、中原 (2005) や山口ら (2012)、竹内ら (2011)、高間, 杉原 (2002) の報告では、ボランティア活動により生きがいが高まるとされているが、一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機に関する報告が少ない。そのため、模擬患者ボランティアに参加する一般市民がどのような動機で参加し、自身にどのような効果を期待しているのかが明確ではない。このような背景から、本研究では、一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機と参加を継続するためにはどのような課題を抱えているかを調査し、参加の意思が継続できるような模擬患者養成のシステム構築のための検討材料とする。

II. 研究目的

一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機と模擬患者ボランティアを継続するための課題を明らかにする。

用語の定義

本研究では、「模擬患者ボランティアについて、藤崎 (1993) と辻本 (1993) の定義を参考に、「看護学生の教育のために、一定の訓練を受けて、実際の患者と同じような行動や反応を再現が可能な患者役を演じる一般市民」と定義した。

III. 研究方法

1. 研究デザイン：質的帰納的研究

2. 一般市民による模擬患者養成プログラム概要 (表1参照)

模擬患者演習に至るまでの模擬患者養成プログラム概要については、表1に示している。

まず、A看護大学のあるB市を中心に広報を行い、「一般市民による模擬患者ボランティアについての講演会への参加者を募った。その後の研修会は、茶話会形式のディスカッションも取り入れながら「現代学生のコミュニケーションに関する課題」「対話の基本」「聴く」をテーマで開催した。また、B市健康祭りでは、「生きがいとボランティア活動」に関する講演会を、A看護大学の大学祭では、患者体験のある講師から「患者体験と学生に向けてのメッセージ」の講演会を開催し、模擬患者ボランティア研修会の参加者募集を行った。模擬患者役に同意される方と研修会への参加のみを希望する方の意思を確認しながら、研修会を開催した。

3. 対象者

A看護大学の模擬患者ボランティア研修会に参加し、第5回の研修会での研究協力依頼とその後の依頼文書に対して、研究協力に同意が得られた一般市民6名。

4. 調査期間

調査期間は、2013年11月から12月までである。

5. 調査内容およびデータ収集方法

調査内容は、①模擬患者ボランティアへの参加動機、②参加してみた感想、③模擬患者ボランティアを継続できそうか、④模擬患者ボランティアを継続するための問題や課題、の4つであった。

面接は、研究協力に同意が得られた模擬患者ボランティアに30分程度の半構成面接を1対1にて行った。面接内容は、同意を得た上で録音もしくはメモによる記録を行った。面接回数は1回であった。

表1 模擬患者養成プログラム概要

	時 期	内 容
第1回	平成25年7月	外部講師による講演会開催 「市民の力で医療を変える」ーまかせる医療から共に考える医療へ 1. 模擬患者の始まりと看護教育における意義 2. 模擬患者市民ボランティアによる模擬患者体験の紹介 3. 患者が求める医療とは（茶話会形式）
第2回	平成25年9月	1. 現代の若者の気質と対話力 2. 患者の心がわかる看護師を育てるためにー討論会（茶話会形式）
第3回	平成25年10月	B市健康祭り 講演会「健やかな毎日を過ごすためにー生きがいとボランティア活動」
第4回	平成25年11月	外部講師による講演会「こんな看護師になってほしい」 患者体験のある講師から学生に向けてのメッセージ
第5回	平成25年11月	1. 対話の基本 2. 効果的なコミュニケーションスキル「聴く」 3. お話しがうまくできない学生への支援とは（茶話会形式） 模擬患者役の依頼を開始
第6回	平成26年2月	シナリオに基づいた模擬患者演習と学生体験 (演じることとフィードバック)
第7回	平成26年3月	シナリオに基づいた模擬患者演習と学生体験 (演じることとフィードバック)
第8回	平成26年5月	シナリオに基づいた模擬患者演習と学生体験 (演じることとフィードバック)
	平成26年6月	模擬患者演習（授業）

模擬患者ボランティアが語りの中で、具体的に語れるように質問し、面接中に研究者が捉えた解釈が模擬患者ボランティアの語りの内容と一致しているかを確認した。

6. 分析方法

本研究目的から調査内容のうち分析の対象とした調査内容は、①模擬患者ボランティアへの参加動機、②模擬患者ボランティアを継続するための問題や課題の2つの内容に絞った。面接にて録音したデータや面接メモから、分析対象の内容を抽出し逐語録を作成して、コード化後に内容分析を行った。分析には、質的統合法(KJ法)を用いた。質的統合法(KJ法)は、川喜多(1970)により発案されたKJ法について、山浦(2008)が実践を通して独自に開発した分析手法である。信頼性と妥当性を高めるために、カテゴリー化が適切に行われているか、一連の過程について、本研究者3名の解釈の一致を確認した。

7. 倫理的配慮

研究対象者には、書面と口頭にて研究の趣旨および内容について説明し、研究協力に同意する場合は同意書に署名を得た。研究協力は、研究対象者の自由意思によるもので、拒否や途中辞退も可能であること、質問に対し答えたくないことは答えなくてもよいこと、また拒否によって何ら不利益を生じないことを説明した。収集したデータは、個人が特定できないように匿名化し、個人情報保護を行うこと、研究者以外は取り扱わないこと、本研究以外で使うことがないこと、研究成果は、学会および論文で発表することを説明した。尚、本研究は、福岡女学院看護大学研究倫理委員会で倫理審査を受け、承認を得てから実施した。

IV. 結果

1. 対象者の概要

対象者は6名で、男性4名、女性2名であり、年齢は50歳代から70歳代であった。職業の内訳は、主婦が2名、定年退職後が4名であった。このうち、3名の方がパートや他のボランティア活動

をしていた。模擬患者養成の研修会では、6名全員が模擬患者役に同意をしていた。面接時間は、20分から45分であった。

2. 一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機(表2参照)

一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機として、総計73のコードを抽出し、それらは19のサブカテゴリー、6つのカテゴリーで構成された。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >と記述する。

模擬患者ボランティアは、主婦や定年退職後の方であった。そのため<社会貢献できていない思い>を感じられており、自宅での役割以外に<新たな役割の獲得>や<社会の役に立ちたい><社会とつながる喜びがほしい><社会参加がしたい>というサブカテゴリーから、【社会とつながりたい思い】を抱いていた。また、ボランティアをするなら、自身の経験を活かした方がよいと、<入院経験を活かせる見通し>や<コミュニケーションが苦手だった過去の経験を活かしたい>、<うまくいかなかった自分の経験を活かしたい>や<医療従事者としての経験を活かしたい>というサブカテゴリーから、【自分の経験を活かしたい思い】を抱いていた。

そして、<看護師への恩返しをしたい>思いや看護学生に対して、患者の期待に添って頑張ってほしいという<患者の立場としての看護学生への期待>や将来のある看護学生をきちんと育てられる大学であるかという<患者の立場としての看護基礎教育への不安>というサブカテゴリーから【患者の立場として看護学生の成長を願う思い】を抱いていた。また、<患者としての残念な経験>や<高齢者の不具合をわかってほしい>というサブカテゴリーから【患者の立場を理解してほしい思い】を抱いていた。

さらに、<学習意欲>や<健康への関心>から、模擬患者ボランティアの学習会に参加し<新たな知識を得る喜び>を得ることができたというサブカテゴリーから、【新たな知識の獲得したい思い】を動機に参加されていた。また、<自宅からの近距離>や現在の自分の可能な範囲であるという<軽い気持ちでやれそう>というサブカテゴリーから、【自分でもできそうな思い】を抱いていることが明らかになった。

表2 一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（一部抜粋）
社会とつながりたい思い (20)	新たな役割の獲得(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・家にいても暇なもので時間がある。 ・他に何かできないか。 ・現在はパートでしかしていないので時間がある。
	社会の役に立ちたい(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアをして自分に返ってくることという、世間の役に立つことがある。 ・役に立てればと思って参加した。 ・やりがい、必要とされるという、役に立っているという実感がほしいと思った。
	社会とつながる喜びがほしい(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・今思うと、外に出て社会とつながる喜びがほしかったのかな。 ・外に出るという、人とつながる効果を感じたのかなと思った。
	社会参加がしたい(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・引退をしたなら社会参加をしたいと思う。
	社会貢献できていない思い(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、ボランティアはしていない。 ・不定期な仕事があるためボランティアをやめた。自分が何もしないと、何だか悪い。 ・社会貢献をしないと自宅での仕事をしているくらいで、特に社会貢献できていないなと思った。
自分の経験を活かしたい思い (13)	入院経験を活かせる見通し(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年、手術をして入院をしていた経験が何かの役に立てば。 ・入院中の患者の小さな希望がある。
	コミュニケーションが苦手だった過去の経験を活かしたい(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生時代、自分もコミュニケーションができなかった。 ・コミュニケーションが不得意であった学生時代の経験を活かしたい。
	うまくいかなかった自分の経験を活かしたい(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のうまくいかなかった経験を活かせればと思った。 ・実習の思い出として、病室前で立ちすくんでいた経験がある。
	医療従事者としての経験を活かしたい(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が看護に関わることをしていたので、その延長線でできるのではないかと感じた。 ・もともと、検査技師だったので病院のことについて興味があった。 ・実は、以前は看護師をしていたから。 ・看護教員をしていたので、何か役に立たば。
患者の立場として看護学生の成長を願う思い(16)	看護師への恩返しをしたい(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・年を取ってくると、病院と縁がある。 ・お世話になっているから看護師さんの役に立ちたい。 ・入院もしたし、看護師さんに接することが多くなる。
	患者の立場としての看護学生への期待(11)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の立場として立派な看護師さんになってほしい。 ・看護学生の大変さはわかるが期待している。 ・くじけずに患者のために頑張ってもらいたい。 ・患者は看護師さんを待っているから頑張ってもらいたい。
	患者の立場としての看護基礎教育への不安(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の立場として、今どきの大学ではきちんとした教育がなされているか心配である。 ・小学校・中学校でも隠蔽体質が見受けられる。
患者の立場を理解してほしい思い(9)	患者としての残念な経験(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・最近の看護師は患者のそばにいない。 ・物の言い方ひとつ、もう少し考えた方がよいという印象を持っていた。 ・入院中の患者の話を聞くだけでは理解ができないから学生さんに話しておきたい。
	高齢者の不具合をわかってほしい(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・年取ると、体のあちこちが悪くなります。こんな状態をわかってほしいと思う部分もある。 ・入院をしたが、看護師さんにはなかなか年寄りの不都合を分かっていただけではない。
新たな知識を 獲得したい思い(10)	学習意欲(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の公開講座に定期的に参加していた。 ・死ぬまで勉強したい。
	健康への関心(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・公開講座などで健康について話をいつも聞いていた。 ・常日頃、定期的に町の健康講座で勉強していた。
	新たな知識を得る喜び(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の東京からの先生の講演を聞いたとき、自分の知らない体験を聞いて知る喜びを味わえた。 ・勉強すると新鮮な思いがする。
自分でもできそうな 思い(5)	自宅からの近距離(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・住まいは大学から徒歩10分くらいであるため、近い。 ・近所だから参画できると思った。
	軽い気持ちでやれそう(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・軽い気持ちでやれそうかなと思って来ていた。

3. 模擬患者ボランティアを継続するための課題 (表3参照)

模擬患者ボランティアを継続するための課題についてインタビューした結果、6名全員が課題はありと回答があり、内容から総計14のコードを抽出し、それらは4のサブカテゴリー、2つのカテゴリーで構成された。

模擬患者ボランティアは、＜スケジュール調整の難しさ＞や＜仕事や用事を優先したい思い＞＜自分

の予定を尊重できるスケジュール調整＞という模擬患者ボランティア以外の予定が尊重できることを願う【自分のスケジュールを尊重したい思い】を抱いていることが明らかになった。

また、模擬患者ボランティアは、ボランティアの継続の責任を感じながらも、模擬患者の責務や将来の自身の意思の変化について＜参加の意思が揺らぐ可能性＞を感じており、【参加の意思が揺らぐ可能性】を抱いていることが明らかになった。

表3 模擬患者ボランティアを継続するための課題

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（一部抜粋）
自分のスケジュールを尊重したい思い (10)	スケジュール調整の難しさ(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬患者の授業で実施時期の自分の予定が不明である。 ・時間的に調整ができるのかどうか、心配である。授業や勉強会のスケジュールはいつわかるか。
	仕事や用事を優先したい思い (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ参加したいが、用事がなければ。 ・もし用事があれば、参加できないかもしれない。 ・今でも不定期に仕事が時々ある。 ・定期的なボランティアの約束ができない。仕事がなければ授業に出れる。
	自分の予定を尊重できる スケジュール調整(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・用事があつたりすると、無責任に請け負ってもいけないのではないかと思ったりもする。早めに授業の予定を聞かせて欲しい。 ・もし用事があつて来れなくても大丈夫なのか。
参加の意思が揺らぐ可能性(4)	参加の意思が揺らぐ可能性(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・軽い気持ちで参加させてほしい。 ・やろうと思っている気持ちが変わったりするのではないか、無責任になってはいけないという気持ちもある。 ・できるものかどうかやってみないとわからない。 ・勉強会に参加しているができるかどうかわからない。

V. 考察

1. 一般市民が模擬患者ボランティアに参加する動機

本来ボランティア活動は、自己の利益に基づかない利他的動機によって行われるものとされてきたが、富重（2002）や松岡，小笠原（2002）は、ボランティア活動の動機を他者に利益をもたらそうとする利他的動機と自己の利益をもたらす利己的動機に分類している。

模擬患者ボランティアの語りにおいて、【社会とつながりたい思い】は、社会貢献ができているという満足感や充実感を得たいという利己的動機であると考えられる。【自分の経験を活かしたい思い】のサブカテゴリーである＜入院経験を活かせる見通し＞＜医療従事者としての経験を活かしたい＞は、自分の経験を活かして役に立ちたいという利己的動機である。一方＜コミュニケーションが苦手だった過去の経験を活かしたい＞、＜うまくいかなかった自分の経験を活かしたい＞は、自分自身の好ましくない経験を踏まえて看護学生を勇気づけたいという利他的動機である面も含まれている。【患者の立場として看護学生の成長を願う思い】は、患者の立場として看護学生の成長を支援したいという利他的動機である。【患者の立場を理解してほしい思い】は、患者体験を看護学生に伝えることで、患者立場を

理解してほしいという利己的動機であると解釈することができる。【新たな知識を獲得したい思い】は、自分自身の成長や新たな役割の獲得、またそれによる満足感を得たいという利己的動機であると解釈できる。【自分でもできそうな思い】は、模擬患者ボランティアの役割について、自分自身の許容範囲にあり、自分や他者の不利益にはならない見通しを確認しているため、消極的な利己的動機と利他的動機を含んでいると解釈できる。

Clary ら（1998）は、ボランティア活動が自分自身に果たす機能として6つの機能を抽出し、ボランティア参加動機機能尺度を開発している。これは、ボランティアを始める動機が、ボランティア活動や自己像へ何らかの機能を果たすことを示している。

6つの機能の1つである「価値機能」とは、自分の価値観や主義を表出することができること、「知識機能」とは、新しい体験や知識・技術の習得、能力を磨くことができること、「社会適応機能」とは、他者とのコミュニケーションをとることができ、友人をつくる機会が得られること、「経歴機能」とは、自分の経歴に箔がついたり新しい仕事のチャンスが得られること、「防衛機能」とは、ネガティブな自己像やプライベートな問題による脅威から自我を守ること、「強化機能」とは、自己が強化されたり、自尊心が高揚したり、安心感を得ることができるという機能である。

模擬患者ボランティアに参加する動機をこの6つの機能に分類してみると、【社会とつながりたい思い】は、社会貢献できていないという思いから逃れたいという「防衛機能」を含んでいるが、人とつながる場を選ぶという「社会適応機能」を果たそうとする積極性も伺える。また、社会貢献をするという自己の強化による新たな存在意義、自尊心の高揚や安心感を得るという「強化機能」も含んでいると解釈できる。【自分の経験を活かしたい思い】【患者の立場として看護学生の成長を願う思い】、【患者の立場を理解してほしい思い】は、患者の代弁者として、もしくは医療従事者としての価値観を表現する「価値機能」であると解釈できる。【新たな知識を獲得したい思い】は、新しい体験や知識の獲得ができる「知識機能」であると解釈できる。【自分でもできそうな思い】は、自分の許容範囲内でボランティアに参加できると見込んでいるため、模擬患者ボランティアに参加することによって、返ってネガティブな自己イメージを持つことがないという「防衛機能」であると解釈できる。

これらのことから、看護大学の模擬患者ボランティアという新たな役割は、自分で可能な範囲の無理がない役割であり、その役割を通じて社会とつながるだけでなく、新たな知識を獲得して成長でき、未来の看護職である学生に、患者の代弁者としての思いを伝え、社会の先輩として後輩を勇気づけることができるものであると解釈できる。

岡本、山本（1985）は、中年期（約40歳～65歳）には自我同一性の問い直しが起こりやすい時期であるとし、退職後の具体的な計画があるものは、社会的役割を自覚し肯定的に受け止めていたことを報告している。服部（2006）は、成熟期50～65歳の発達危機を「同一性再確立対消極性」と設定しており、自分の存在を見直すことによる戸惑いがあり、それを克服して新しい自己の発見という同一性の再確立ができると述べている。その大きな要因に定年退職を挙げている。一方、堀内（1993）は、専業主婦は有職者よりも中年期に打ち込める活動を家庭外に求める特徴があることを指摘している。

これらのことから、本研究対象者は50歳代から70歳代の主婦や定年退職後の方であることから、自我同一性の再構築の時期にあり、この模擬患者

ボランティアという役割を新たな役割として取り入れることを吟味していることが考えられる。

模擬患者ボランティア研修会の広報活動として、「生きがいとボランティア活動について」の講演会を開催したが、このことは、自我同一性の再構築を発達課題とする年代にとって、発達課題を達成するためのヒントになったことが推察される。さらに模擬患者ボランティアの活動そのものは、新たな役割の成果を自覚できることで、その発達課題の達成を促進する効果が期待できることを示唆している。

2. 模擬患者ボランティアを継続するための課題

模擬患者ボランティアは、【自分のスケジュールを尊重したい思い】【参加の意思が揺らぐ可能性】を抱えていることが明らかとなった。

【自分のスケジュールを尊重したい思い】の＜スケジュール調整の難しさ＞や＜仕事や用事を優先したい思い＞＜自分の予定を尊重できるスケジュール調整＞については、模擬患者ボランティア活動以外の仕事や余暇活動を尊重したい思いの現れであると考ええる。

また、【参加の意思が揺らぐ可能性】については、模擬患者ボランティアの具体的活動を理解・経験していない時期であったために具体的な活動内容が自分自身に可能であるかの判断がつかない状況であることが推察される。

3. 模擬患者ボランティアを継続するための支援

岡本、山本（1985）や服部（2006）の報告から、中年期には自我同一性の再構築という発達課題があり、この模擬患者ボランティア活動が好ましい影響を与える一つの要因であることが示唆された。Greenfield & Marks（2004）は、ボランティア活動によって役割を持つことが身体的・精神的健康により影響を与えることを報告しており、高齢者にとって社会的役割が重要であることを実証している。しかし、服部（2006）は、自我同一性の再構築の時期には、戸惑いやためらいも強まることを指摘しているため、模擬患者ボランティアの育成やその継続についての支援は、模擬患者ボランティアの健康に寄与することであるともいえる。

これらのことから、新たな社会的な役割である模

擬患者ボランティア自身が、その役割を担っているという自覚ができるよう、看護学生の直接的な反応や模擬患者演習における看護学生の学びの報告などの教育の成果を実感できるようなシステムづくりを考える必要がある。それが、模擬患者ボランティアを継続する活力となり、その活力からボランティア活動を継続できることが、模擬患者ボランティアの身体的・精神的健康によい影響をもたらすことが期待できるのである。

また、模擬患者ボランティアを継続するための課題としては、模擬患者ボランティア活動以外の仕事や余暇活動を尊重することや、ボランティア参加の自由意志が尊重される環境づくりが求められていることが示唆された。

これらのことから、模擬患者研修会や模擬患者演習のスケジュールの通知を早めに行い、模擬患者演習には予備要員を確保して、急な欠席があっても運営できる体制をつくるなど、模擬患者ボランティアが自分の予定や余暇活動を尊重できるようにする必要があると考える。

本研究の限界と今後の課題

本研究は、A看護大学における模擬患者ボランティアのうち、研究協力の同意を得た6名の対象から得られた知見であったため、地域や養成機関、対象者が異なる場合に適応できるか否かを確認する必要がある。さらに、質的研究では、研究者の解釈が研究結果に影響する。今後、地域や養成機関、対象者の特性を考慮し、対象者を拡大して研究結果を確認する必要性がある。

VI. 結論

A看護大学における一般市民の模擬患者ボランティアの参加動機は、【社会とつながりたい思い】【自分の経験を活かしたい思い】【患者の立場として看護学生の成長を願う思い】【患者の立場を理解してほしい思い】【新たな知識の獲得したい思い】【自分でもできそうな思い】が抽出された。また、模擬患者ボランティアを継続するための課題は、【自分のスケジュールを尊重したい思い】【参加の意思

が揺らぐ可能性】が抽出された。これらのことから、模擬患者ボランティアは、看護学生の成長を願い、社会の役に立つという利他的な動機だけでなく、自分自身の成長や新たな存在意義、患者の立場を理解してほしいという利己的な動機があることが確認された。また、模擬患者を継続するための課題においては、模擬患者ボランティア活動以外の仕事や余暇活動を尊重することや、ボランティア参加の自由意志が尊重される環境づくりが求められていることが示唆された。

尚、本研究は、2013年度福岡女学院大学活性化助成金事業の「市民ボランティアによる模擬患者養成プログラムの開発」の研究の一部である。また、本研究の一部は、第24回日本医学看護学教育学会で発表した。

【文献】

- 1) 青木久恵, 窪田恵子, 青山和子他.(2011). 模擬患者演習での学び(その1) 実習を経験していない学生による援助場面. 第9回国立病院看護研究学会学術集会収録集, 67.
- 2) Barrows, H.S. (1968). simulated patients in medical teaching. Can Med Assoc J, 6, 98(14): 674-676.
- 3) Clary, E.G., Snyder, M., Stukas, A., Haugen, J. & Miene, P. (1998). Understanding and assessing the of volunteers; A functional approach. Journal of Personality and Social Psychology, 74, 1516-1530.
- 4) 大学和子, 西久保秀子, 土蔵愛子.(2006). 基礎看護学における客観的臨床能力試験(OSCE)の実践—ボランティアによる模擬患者と現任看護師による標準模擬患者との評価から. 聖母大学紀要, 2, 27-34.
- 5) 淵本雅昭, 渡邊由加利, 山本勝則他.(2012). 看護基礎教育における模擬患者養成プログラムの実際とその検証. 札幌市立大学研究論文集, 6(1), 3-10.
- 6) 藤崎和彦.(1993). アメリカの医学教育における模擬患者導入の現状とその理論. 看護展望, 18(8), 44-48.
- 7) Greenfield, E.A. & Marks, N.F. (2004). Formal volunteering as a prospective factor for older adults' psychological well-being. Journal of Gerontology, 59, 258-264.
- 8) 服部祥子.(2006). 生涯人間発達論 - 人間への深い理解と愛情を育むために -. 121-132, 医学書院, 東京.
- 9) 堀内和美.(1993). 中年期女性が報告する自我同一性の変化 - 専業主婦、看護婦、小・中学校教師の比較 -. 教育心理学研究, 41(1), 11-21.
- 10) 本田多美枝, 上村朋子.(2009). 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察—教育の特徴および効果、課題に着目して—. 日本赤十字九州国際看護大学 IRR, 7, 69-77.
- 11) 川喜多二郎.(1970). 続・発想法. 中公新書, 東京.
- 12) 厚生労働省医政局看護課.(2007). 「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書. 2013-11-10.
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
- 13) 厚生労働省医政局看護課.(2010). 「看護教育の内容と方法に関する検討会」報告書. 2013-11-10.
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>
- 14) 黒岩かをる.(2011). 特集 模擬患者を取り入れた教育を見直す Part 1 生きた教材としての模擬患者 MITP の養成. 看護教育, 52(7), 520-527.
- 15) 松岡宏高, 小笠原悦子.(2002). 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機. 体育の科学, 52, 277-284.
- 16) 三好麻紀, 青木久恵, 窪田恵子他.(2011). 模擬患者演習での学び(その2) 実習を経験していない学生による援助場面. 第9回国立病院看護研究学会学術集会収録集, 66.
- 17) 中原純.(2005). 高齢者のボランティア活動に関する研究の動向—シニアボランティアの現状と課題. 成老病死の行動科学, 10, 147-155.
- 18) 岡本祐子, 山本多喜司.(1985). 定年退職後の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, 33(3), 185-194.
- 19) 清水裕子.(2007-2009). 看護教育における模擬患者養成プログラムの開発. 基盤研究(C) 課題番号 19592469.
- 20) 高間由美子, 杉原利治.(2002). 高齢者の社会参加と生きがいに関する研究. 東海女子短期大学紀要, 8, 31-38.
- 21) 竹内香織, 磯和勅子, 福井享子.(2011). 地域高齢者における主観的幸福感に関する社会活動要因. 三重看護学誌, 13, 23-30.
- 22) 富重貴志.(2002). 学生のボランティア動機に関する探索的研究 - 超高齢者への談話ボランティアに対する学生の意欲との関連 -. 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, 7, 45-53. 25) 辻本好子.(1993). 医学教育への市民参加 - 模擬患者の試み. 看護展望, 18(8), 54-56.

- 23) 辻本好子.(1993). 医学教育への市民参加 - 模擬患者の試み . 看護展望 ,18(8),54-56.
- 24) 山浦晴男 .(2008). 科学的質的研究のための質的統合法 (KJ 法) と考察の理論の技術 . 看護研究 ,41(1),3-10.
- 25) 山口静江 , 近藤昊 , 柴田博 .(2012). 農村地域の自立高齢者における productive activities が主観的幸福感に及ぼす影響 . 応用老年学 ,6(1),59-69.